

本稿を記すにあたり、岩田朋文、北野忠、佐野真吾の各氏（アルファベット順）に多大なご助力をいたただいた。御礼申し上げる。

引用文献

- 阿部光典・中村俊彦, 1991. 関東地方におけるコガタノゲンゴロウの記録追加. 甲虫ニュース, (96) : 5.
- 新井浩二・亀澤洋・岩田泰幸, 2018. コガタノゲンゴロウ. 埼玉県環境部みどり自然課(編), 埼玉県レッドデータブック動物編 2018(第4版), p. 200. 関東図書.
- 平井剛夫, 2020. コガタノケンゴロウのライトトラップによる採集の記録. 駿河の昆虫, (27) : 7382–7383.
- 苅部治紀(編), 2011. 水生昆虫大百科 2011 年特別展「および! ゲンゴロウくん~水辺に生きる虫たち~」展示解説書. 140 pp. 神奈川県立生命の星・地球博物館.
- 水野弘造・細田倅市, 2010. 莽崎市(山梨県)の甲虫. 206 pp., 日本甲虫学会.
- 森正人・北山昭, 2002. 改訂版図説日本のゲンゴロウ. 232 pp., 文一総合出版.
- 長野県環境部自然保護課, 2015. 長野県版レッドリスト～長野県の絶滅のおそれのある野生動植物～. 233 pp. 長野県環境保全研究所自然環境部.
- 中島淳・林成多・石田和男・北野忠・吉富博之, 2020. ネイチャーガイド日本の水生昆虫. 352 pp. 文一総合出版.
- 中村光, 1979. 県内で採集した甲虫目(1). 山梨の昆虫, (9) : 209–236.
- 西原昇吾・苅部治紀・北野忠・中島淳・永幡嘉之, 2015. コガタノゲンゴロウ. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—5 昆虫類, p. 251. ぎょうせい.
- 四方圭一郎, 2012. 飯田市美術博物館に保管された長野県南信農業試験場コレクションに含まれる注目すべき昆虫類について. 伊那谷自然論集, 13: 53–57.
- 多比良嘉晃, 2019. コガタノゲンゴロウ. 静岡県くらし・環境部環境局自然保護課(編), まもりたい静岡県の野生生物 2019—静岡県レッドデータブック<動物編>, p. 255. 静岡県くらし・環境部環境局自然保護課.
- 東京都環境局, 2014. レッドデータブック東京. (<https://tokyo-rdb.jp/index.php>) (2020年5月18日参照)
- 山梨県森林環境部みどり自然課, 2018. 2018 山梨県レッドデータブック. 山梨県の絶滅のおそれのある野生生物. 290 pp. サンニチ印刷, 甲府.
- 柳丈陽・高野直也・中村涼, 2020. 約30年ぶりの記録となる千葉県産コガタノゲンゴロウの記録2例について. 月刊むし, (587) : 22–23.
- (太田圭祐 300-0032 土浦市湖北1-9-12)
(山崎駿 263-8522 千葉市稻毛区弥生町1-33
千葉大学理学部化学科)
- (富樫和孝 408-0024 北杜市長坂町富岡2812
北杜市オオムラサキセンター)
- (岩田泰幸 160-0022 新宿区新宿2-1-8
(公財)文化財虫菌害研究所)

【短報】宮古諸島大神島と多良間島のカタボシテントウの記録

カタボシテントウ *Coelophora inaequalis* (Fabricius, 1775) は、スリランカから東南アジア、台湾、中国、日本、フィリピン、マリアナ、ミクロネシア、ニューギニア、ニューカレドニア、オーストラリア、タスマニア、ハワイなどに分布する (Leeper, 1976; Sasaji, 1982). 日本では小笠原諸島に分布することが知られていた (佐々治, 1985). 本種は比較的最近になつて沖縄県に移入されたと考えられており (丸山・大野, 2011), 沖縄島、浜比嘉島、宮古島、石垣島から記録されている (丸山・大野, 2011; 小浜, 2012; 小浜・砂川, 2014). 筆者は、これまで記録がないと思われる、宮古諸島の大神島と多良間島で本種を採集しているので報告する.

採集標本データ:

1 ex. (六紋型: 図1),
大神島(沖縄県宮古島市), 5. III. 2016:
1 ex. (亀甲型: 図2),
多良間島塩川(沖縄県多良間村), 20. III.
2016. 以上、筆者採集・琉球大学博物館(風樹館)保管.

本種の上翅の斑紋・色彩は変化が多いが (Houston, 1979; 佐々治, 1985), 沖縄県から採集された個体の斑紋は亀甲型と六紋型の2型である (丸山・大野, 2011; 小浜, 2012; 小浜・砂川, 2014). 今回得られた大神島産は六紋型で(図1), 多良間島産は亀甲型(図2)であった.



図1. 大神島産カタボシテントウ(六紋型).



図2. 多良間島産カタボシテントウ(亀甲型).

引用文献

- Houston, K. J., 1979. Mosaic dominance in the inheritance of the colour patterns of *Coelophora inaequalis* (F.) (Coleoptera: Coccinellidae). Journal of the Australian Entomological Society, 18: 45–51.
- 小浜綾雄, 2012. 沖縄県浜比嘉島でカタボシテントウを採集. 月刊むし, (496) : 47.
- 小浜綾雄・砂川博秋, 2014. 宮古島における外来種カタボシテントウの記録. Pulex, (93) : 647.

- Leeper, J. R., 1976. A review of the Hawaiian Coccinellidae. Proceedings of the Hawaiian Entomological Society, 22: 279–306.
- 丸山宗利・大野 豪, 2011. 沖縄県におけるカタボシテントウ *Coelophora inaequalis* (Fabricius, 1775) の記録. 昆蟲 (ニューシリーズ), 14: 112–115.
- Sasaji, H., 1982. A revision of the Formosan Coccinellidae (III) subfamily Coccinellinae (Coleoptera). The memoirs of the Faculty of Education, Fukui University, Series II (Natural Science), (31) : 1–49.
- 佐々治寛之, 1985. テントウムシ科. 黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之 (編著), 原色日本甲虫図鑑 (III). pp. 244–270. 保育社. 大阪.

(小浜継雄 901-2216 宜野湾市佐真下 28)

【短報】伊豆諸島三宅島からのタテスジヒメジンガサハムシの記録

タテスジヒメジンガサハムシ *Cassida circumdata* Herbst, 1799 は、日本および中国、東南アジア、南アジア、ハワイ、パラオ、ミクロネシアなどに広く分布している (Borowiec, 1999; Gressitt, 1955; Samuelson et al., 1999; Takizawa & Kusigemati, 1996). これまで、日本国内では硫黄島および中硫黄島、種子島、屋久島、宝島、奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島、沖縄島、浜比嘉島、藪地島、津堅島、伊平屋島、瀬長島、渡名喜島、久米島、南大東島、宮古島、石垣島、波照間島、西表島、与那国島、魚釣島などの小笠原諸島や南西諸島以南の島々から記録されていた (Azuma & Kimoto, 1981; 今坂・祝, 2007; Kimoto, 1966, 1980; 木村, 2011; 小濱, 2010; 楠井, 2017; 楠井・宮城, 2017; 長嶺, 2007; 永田, 1993; Nakane & Kimoto, 1961a, b; 重藤, 2019a, b; 高橋, 2012; Takizawa, 1982; 滝沢, 2014). しかし、近年、分布を北へ広げており、伊豆諸島八丈島や大阪府、奈良県、岡山県、宮崎県において発生が確認されている (藤江, 2017; 川畑, 2010; 中武, 2009; 奈良県, 2020; 大阪府, 2012; 東京都, 2004; 末長, 2016).

なお、末長 (2016) によると、岡山県の記録は室内に置いてある飾り花の下に落ちていたものであり、偶産である可能性があるとされている。また、Chūjō (1934)において素木得一博士が “Kagoshima”



図 1. 三宅島産タテスジヒメジンガサハムシ。

で採集された標本を基に “Japan proper (Kyūhū)” から記録されており、Chūjō (1935, 1957) や Chūjō & Kimoto (1961) においても本種の分布にそれぞれ “Kyushu” および “Kagoshima in Kyushu”, “Kagoshima” が含まれている。しかし、Chūjō (1961) では、本種の分布から九州が除かれており、Kimoto (1966) における本種の分布では “Japan (?Kyushu)” とされ、その後の文献からは本種の分布から九州が除外されている。本種の正確な分布や九州への侵入時期の把握のため、過去の標本を調査する必要がある。

本種はハマヒルガオ *Calystegia soldanella* やヨウサイ *Ipomoea aquatica*, サツマイモ *I. batatas*, モミジバヒルガオ *I. cairica*, コダチアサガオ *I. fistulosa*, ヤツデアサガオ *I. digitata*, ノアサガオ *I. indica*, アサガオ *I. nil*, グンバイヒルガオ *I. pescaprae* などのヒルガオ科 Convolvulaceae の植物を寄主植物とし (Chūjō & Kimoto, 1961; 重藤・吉武, 2020; 滝沢, 2014; 東京都, 2004), 幼虫・成虫共に葉を食害する。特に、サツマイモの害虫として知られており (日本応用動物昆虫学会, 2006; 小濱, 2010; 高良・東, 1970), 発生が確認された都府県では病害虫発生予察特殊報を出すなどして注意喚起を行っている (奈良県, 2020; 大阪府, 2012; 東京都, 2004).

今回、筆者の一人である瑠寺が、2018年5月に伊豆諸島三宅島において昆虫相の調査を行った際に、本種を採集しているので、同島初記録としてここに報告する。本報告は伊豆諸島からの2島目の産地となる。

3 exs., 東京都三宅村坪田長太郎池付近, 12. V. 2018, 瑠寺採集, 重藤保管. (図1)

ノアサガオのスウェーピングで得られた。採集地 (図2) では同時にヨツモンカメノコハムシ *Laccoptera nepalensis* Boheman, 1855 も複数得られている。本種はタテスジヒメジンガサハムシと同様に



図 2. 三宅島におけるタテスジヒメジンガサハムシの生息環境。